橘柱集

911.3
キ

陸乃松しまおふ大和の歌をたちあしまの浦
其葉に筆をとり流し吟せし詩のかたはらに
松のしまをわが心のまゝに風雅乃辭の吟をしる
に雅ある遊乃數御系属新樓にのたまふ
雅莚の花を称へ松のましまをはるにおく
いふきに月くにきぬを正風徐ろにあらはるる

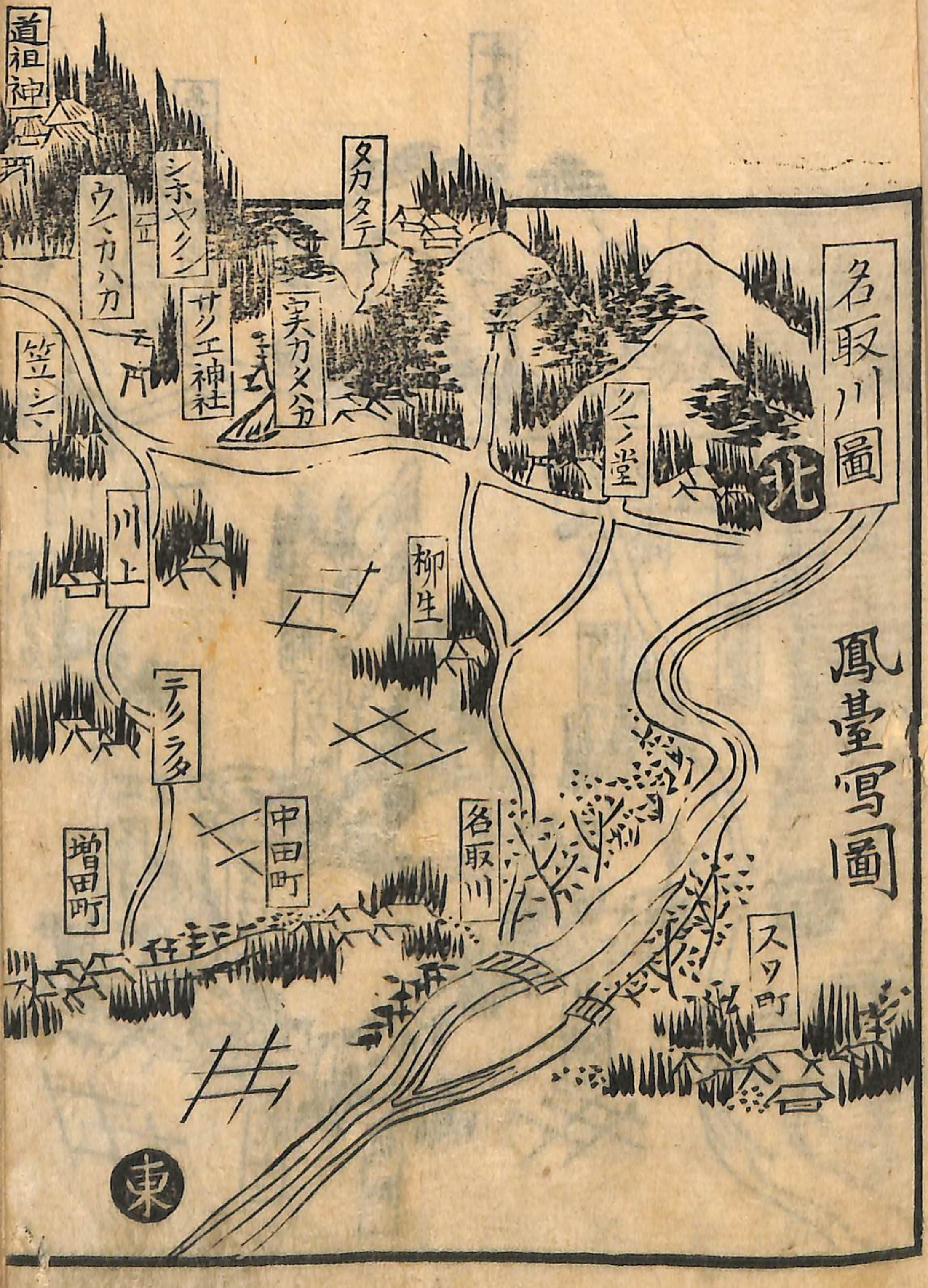
今様之[illegible]のむかしに歸る時なるべき也
[illegible]をまなびて[illegible]に[illegible]者
こゝに[illegible]筆已に[illegible]満ちて[illegible]
一首[illegible]嘆て[illegible]を文[illegible]深く[illegible]
[illegible]の[illegible]ひそかに[illegible]情を[illegible]
いさゝか[illegible]の[illegible]人を[illegible]

[illegible]宮城[illegible]
[illegible]たまし[illegible]
[illegible]をましらひて[illegible]の
川[illegible]の[illegible]撰[illegible]種集[illegible]
題し[illegible]の[illegible]
[illegible]しむと[illegible]に[illegible]者[illegible]

あ鳥の獨住庵湖秋なりけらし

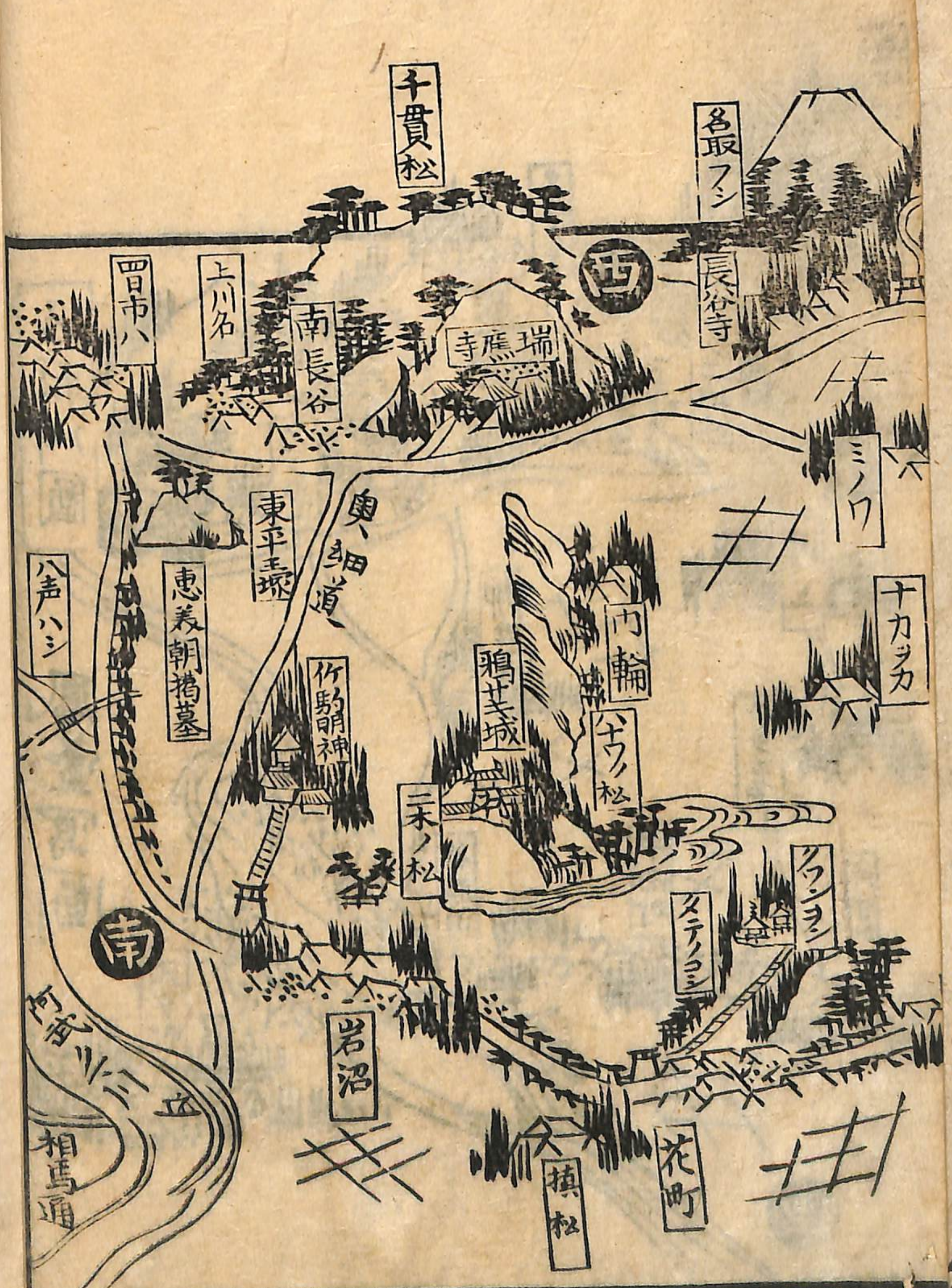
擣柱集

春代曙をおもしろしとおもへともやちなるあはれ秋
夕暮はかなしくつれなきもおもひわひつゝ思ふ心
いつれも声をつくしけんされとも志士は秋を思ふ
業平小町ノ向ふる秋の夕くれをあはれとやしに
心つくしを淡の閑寂感慨にして風流者のあはれを知る
いつれもの庵にあはれとゝ見えしハ筆紙におよひかたきんハ
感慨はあはれと知りつゝ人しるもをとき知えしもの



与へしきうあるて長(寿)の名てし折から時をうつや
鳴子山を採りも越ともも跡をたどる老の身まゝす
安けれとも有十五日の為かし大ふんをまて年れ
りんたすれるしも様々をも以て日をさらしやおもてきち
おもしろきうちにも名取川の流つゞきに足をとゞめけ松のれ
やさ風雅の志あらす無しは武様をそわつらしと
樗頼ふかくかゝりつけゝる

風流行名取川流柳のれ　路玉



鹿島杉より汐干陸の雪かりもそ

若葉にも日みる山の中やまゝの川　滄水

月と梅正月腹のすゝおうれ　眠石

雪の付宮の宮や鳥ゐもねふつゝ手　原牛

しめの垂みせてくし鉄し尾尾の根　若雨

てらすや以つ日小ぬまでこすゝもさるのふ女

白かさゝゝまの紫のうえ乃かさしとて　風實

ちるまえもしてむやりみち出し月のされ　鶴尧

さつ雁やなこその関に脚まへて　松把

月によき嫁とつもちし程かな　虱つゝ

咲雲を挑る声も新し小松にる　千霄

明月のむ所やさしき

きゝしかし芒画く刈しまくの手すむ　雪雄

翌りや由ん常に雪痕乃むし雨　應々

灯ともせハむのうへ初新涼師　菊鳰

まよ〱新せ見淡路に春と風柳月　茶静

江戸月の落つく新や辛夷ち風　葛洞

一声に白のすゝ風や深くあれ　南井

あらひ麻やゝみさりの亭主飛　園丁

卯のむに馬頭形〱折所　孤山

咲ぬるもきんて居とり時る　吏牛

袷着て揺ぐのちり花山色か菊　老樗

卯のむや家形たのして任に家　可丸

むかゞるよ楽雪のつゝそしめ　蕉雨

みつかね玉のあまふかくれなり　詠帰

萩咲やともし火向ふ万福寺　琢且

あはしき夜草の夕蔭なつかしく　杉露

あきの夜に不断も今に閑居哉　杉枝

秋風の竹の葉そらに流さる鳧　久蔵

荒海に引よりし苦陸ぬ　千萩

井戸掘もうちやすむ月の日和かな　宇橋

明ぬのや菊新ひより雁乃声　一肖

竹の柱しろけつく背戸の秋　一蕙

山路きて見れ〱し牡丹のちりほうと　蕉雨

まうけたる〱門乃夕かな　路王

銅桶をあしふきけり此雨ふりて　千萩

肩くらけりし夜杭のみけり朝　雨

わやくをはりく鳥なれを見よく　王

七ヶ国乃池に月乃こそみなり　萩

皇子にはあくまでのかゝへらや　雨
陀羅尼よまるゝ声洩かゝるさ　玉
あらそ秋ていつくしき波の文字　萩
桜なるしりゆゑしかゝりし庵　雨
黄牛を追やる市の外れまえ　玉
まるまつふさかれて悪ひ酒もなく　萩
敵とも志しれちかひし月の霜　雨
けやきを雨つゝみのなかに置まする　玉

彫つきうらかくれし羽織きて　萩
もはれにやさしに水の底けり　雨
むの書乃　謙ひかま熄れしに　玉
評はおしまひ茶漬匂合　萩

纏のかたとふみてそれ苦楽に　梅室
棚田平田へかゝる水音　路玉
鋪者の庵はうしめる窓明て　白圭

よき客のくる日に腹はよかりける　室

三日月をしろうに履て京に入　玉

扇ふの世帯節季のちらさ　圭

かしこくて留守しる人にせまる状　室

もみぢに声もさびしき明礼　玉

時雨もしほれ文たしと奈良坂や　圭

鬼こもれるとおもふ中宿　室

我まゝに絵の心なる清書し　玉

奉幣もさぬに明行はれ出る　圭

浪ぞの静気に隠るゝくれの月　室

ともし大事して飛すかまきり　玉

三蔵は家の縁をきはせとて　圭

清き泉の流乃時ふくれ青　室

むさしの庵のかしむら雨ふし指　玉

まみれおれはわしきけふます　圭

六月や据ゑつけて乗船の底　護物

うくひすは宮こゝろする名所かな　獅雄

雨されもむかしの風見えて下り　車両

初蕣やあさくおもふけし罌魂　對山

きのふより生るゝもみえて秋の蝶　今日庵

名月に来る事も流よ昔暮の錦あり　寛山

かた舟の月や帯へ下る雪みる水　湖山

曙はしめふりの形や江の千鳥　梅鶏

傘出してしくれを雨にしてもかり　有臺

下ろひ来やむかしの風吹見はれ花　心非

新古粟も花も中にるゝ牡丹哉　鶯笠

わきまへの上野に添りけり

一すじに来る人にもむかへ出る角　五縄

初と秋菊咲つけてかへ神の旅　綾卧

かくひきもまたなつしや畑者　芽九

出てうしや梅花あさりの枯柏　鶏周

河船をのりて高付人参り山さかり　川二
桐の葉ひろふて見ても捨よかり　浦人
雛形を人の見て来る之子かり　鹿太
いつも門せまくことに松かる五月雨　麦固
かけたしの座敷にあそふて
蕗出しもみそ墓をすまし春の子　一茶
灰汁桶にむしのつけたむ小家かれ　露丸
折りふさ山葵て世まても時なる　雲帯

七将の数にあれしまさくすゝれ　如水
枝鉢見えて既にちるまで跡かり　八朗
もとめてるやもれ宿氏や春の雪　芳汀
打けやむしける花の世は清かれ　女 雨紅
さらくとも身の家やまし時の勝　正阿
あら降もみるゝ色気の一春秋　雨十駕
おかしいてす二日もくらふところもかな　周竹
西風のつさとしえるゝや柳の花煙　敬斉

梅さしぬまろや雛子は山ざくら　石鳴

くにひす銭ありてひかる氷の底なる　徐涯

志のゝめやむしろは土のゝく猿　何頼

子は日とてふ秋の扇ましけ婦き　若人

かなつきて三河なりけり

咲きし鳥て名のしせん黒羽　蘭所

打月ら衣洗入日や弱迎　塞馬

二番子を作るを哀れし郭公　阜池

山吹は屋根の出水ゝ色く

旅立人はものときこゆる露のある　宜彦

早き秋やあれゝと此露の声かな　沙鴎

雨夜の蛍ゝ思ゝ寺へ卯き也　而后

茶は名の名をもとむしや月の霜　呉山

鮑の出は伊勢人に

打あけみすゞや身は秋なし宵は月　椿堂

配ゝて中川ひゝ声此ほとゝ哉　以大保

又湯にも名はしらねとも桔梗哉　雨木

青柳やかゝみしらまし蝶まて　省吾

我宿の秋ふもとに来てそゝくかな　六車

おゝつれて遊ぶや今の日盛とも　杉永

一群は山に据るなりかへる雁　和峯

百羽搗もえてかへても帰る路　魯斉

又ふ家めくにぞ有る宿の時雨　青項

梅ちるや秋の寺清酒波吹ぬし　志山

秋の間や寒き袖かる梅も含　虹橋

すゞしさや宿の岩井はなれまし　枳園

瓜畑や小さき茄子も垂る雨あかりさ　一牛

秋風や花より秋見しおもしろし　志道

春風や鞍の先うつ秋しきれ　翠川

さゆる秋大秋ふりふ

摘先まて中る花のひかりの風　梧青

夕暮をところゝ採て蓑み宿　和山

浮葉にも雨こぼしつゝ蓮乃つぼみ　耕六

来かゝりしや秋の雁見すれちかひ　杜口

ゆきもせしろみ河内木ふ

雲井るしとおもふ麻のころも雪　禾和

秋の雨しあめの山蛾なりけり

梅咲て見せし井　様井尾　仙草

一本つゝ蕎より雨わか喜　柳　鳳也

松に星今み相当坐し　常在　無物

灯ともせし聖日ころつゝく粽の香　布雪

旅衣ときやしころや田唄せ　志けめ

ゆりくと咲るり崑峩の山さかり　十丈

篠のゝ盆ま手に出て秋もろ　滄々

寺前ひらく見るされて神の糸　蒼虬

秋風やみなさる手くとしろうら　仙草

引板をひかへ月みなのゝる　路玉

落葉に新酒たまりし瀬をはけて　十　丈
鶯も白くりり手あらひせに李　草
夜の窓みにちらしはれ誉むなしの修　玉
縣ほそねの幕より走しふ流　丈
灯のおふ黄炭箱をひとつ居く　草
さがれしまてつれたまめる篇宿　玉
むしろ敷いて隔走つめ中すれ血の手あぢ　丈
みしくく衛掃けころつきしず　草

轅ふもやりつくちやとたのましくみ　玉
若の冬ちの空流く中ころう春　丈
月出ます海乃たぶし浮にしき　草
幣はちまれふむらふ穂花　玉
軒らぜん影ちまくかしまう　丈
出抱竈のけふつきたまひく　草
あかされ八年の大破を咲ふきけ　玉
谷深くたらふ声をしきちる　丈

芦火燙雖陵あらんハ

さゝ山や声よひくらんなかしくれ　卧鵬

坂ハの鳥や凡香秋つくく翔くもり　藍外

ちらんてもふ竹ハつゝみゝちる搖　屋蔦

神代の神もふるちよし松下掃　公路

徹田ゆくもすゝ紅葉の広う外　長成

まつちたすむやかすむも大之十日　魯隠

あれゝ松手ハすれぬ霄の声の人あ　奇袁

坂の背ふつけてやらん不二の雪　井眉

けまちふ遊ばはの人ハ

松の葉はつるいはゝ布たなふ搖うれ　閑齋

風のふゝ寄しそ雨ちる新月かな　蔦暁

白けしの梢ふ志ほまして月ハ姥　神月

汐ふ分まくも一の松う紅葉　梅儿

まつやくま別ゑてちるとひとつ雁　栗三

河邊の花代松ハ色ある志ぐれかな　柯山

初雁やひとつらしきりに渡海　在竹

さかしの加賀人まへ

陽にかとさきれた法れる月かな　呼亭

雑兵やきのまつりと咲やこれ　木碓

そうてしる咲山茶花の一さかり　丹嶺

な草やくらき雪ちる一寺の月　青夕

雪深越ゆまへ八

まの月新おこしを川のめ　天洲

との雲かゝる挿さる月の庵　北海

明り菊入り舟あらしの戻り亀　真昌

竹をへてかすくま出るや明の小楢　斗山

秋の□よ二日よりて板のもと　月江

志ほの海をさわなるてほ具さし　内海

まへのうへ八香るなり草の宿　其誓

落付て何をも明さの秋の旅　白波

失亀のゐも志れる萩の末　伯芝

鶏頭にまつ色てらつや垣の梳　羊戈

庭なかり影あるほや稲光　蘭隅

山城の名も出来たり木下闇　魯樵

ちつ雁に秋おくりて身に添ふ　芝脊

ちる時も秋の月夜さまつ桂　魚州

青おくれ寒さを力や苔の花　閑雅

椰子の実は越後なりけり

覺る人のとしの暮の花あそびなる　曳尾

さゝにてハ雨もよしよ月の雲　其夢

浴戸山の杉みえぬ時雨亀　如栩

五月雨にえん…しまきて無　年眉

みじかき夜も雨や井の中　琉卮

将に出る凪の明に一心太　呉洋

…とりやかゝし楫の魚　蕉扇

次第…雪の山　秋水

紅花染の出羽のはなるゝハ

なかくまて来兎かくるゝ行とき世　稲丸

霧も晴の松ひとつより明かゝり　文来

志つかに荘のこほるゝもひろふ蕗の薹　布水

むし市や茄子の花も小鴻払　孤山

捨おかるゝふ三日月の空　路玉

座さみはや々く手に櫻あまりて　山

またきくものせる車川こむ　玉

ぬくとくゑの二階はくゝ丈向ふ　山

風まつ宿みれは帆雪みかり出し　玉

然固きハ一里ゆのひさし松並木　山

うれしさく牛乃札はけて行る　玉

後家さんはつけつりも人の法こまり　山

きりゝ肉の蝶さぬくゝみてつ八流　玉

秋風はいかのもと出一色みのまて　山

いつくとひろくも角とのもうし法く　玉

なかくしまてこ来鬼かくれ行とき世　稲丸

霧も浪の松ひとつより明てり　文来

きりく萩のこほれもひろふ鶉の声　布水

もし市や芥子の花も小鴉　孤山

拾ゑ月のうちに三日月の空　路玉

席をみ明行く身に櫻あり　山

さくさくとのせし車川こむ　玉

うきもニ　今は酒ともなし月お　山
すけし将棊をさしたる門に　王
後は山川さかり鉢ありき遊ばする　山
ある井をそしる昼の　鮠　王
大切れ名残のおもきをつけあくみ　山
菓売ありて来るかけろふの中　王
かくれ忍しをかしこくもかしこのひとり旅　山
春しておく将の家中にある楚なき菜　清代のあり　王

うきあてこし出地すけるき将氏の仕合くいあ風
されいもれ名のる風魂をやしなひかてこの旧跡に
むしみ得たるもみしえのちはほてりも
ちるとせる離絡の法忽らみをるかし後て
飛遠き手里の称あり手なて一先あれ路に足を
行むけさるありぬ錦をたおへかへつらんかりけり
ちるくにまおりきる焼しおてはあるべし

鶴歩庵題

[illegible]

聖和學園
短大
第 6600 號
受入
昭 36. 3. 14 日